

第48回理事会開催

昭和62年度決算報告の承認など

去る6月16日(木)、当財団の第48回理事会が都内にて開催され、昭和62年度の事業報告および決算報告が行われ、原案通り承認された。

その他、評議員および選考委員(研究助成、研究コンクール、市民活動助成)の選任、フォーラム助成対象の決定が行われた。また、成果発表助成対象や新設のアドヴァイザー会議について、および、この5月末日をもって締切った研究助成と市民活動助成の申請状況についても報告があった。

なお、理事会後、今期で副理事長を退任することとなった森秀太郎氏より挨拶があった。

第13回評議員会も併開

理事会に引き続き、第13回評議員会が開かれた。

ここでは、昨年度の事業内容や今年度の事業計画に関する報告が行われた他、理事・監事の選任も行われた。

また、上記の理事会・評議員会終了後、当財団の国際助成活動につき、選考委員長長の石井米雄・京都大学教授より報告が行われた。

▼報告を行う石井氏



1988年度研究助成・市民活動助成 申請実績と助成予定

件数	申請実績	個人奨励研究 (第I種)	試行・準備研究 (第II種)	総合研究 (第III種)	研究助成・計 (I・II・III種合計)	市民活動助成
		助成予定	助成予定	助成予定	助成予定	
金額 (万円)	申請実績	61,607	108,603	47,492	217,702	4,399
	助成予定	4,500	5,500	10,000	20,000	1,000

おもな内容

- ◆ラオスの貝葉文献セミナーに出席して……………2
- ◆インドネシア若手奨励研究助成について……………3
- ◆『医療にけるテクノロジー・アセスメント』を開催…4
- ◆アメリカのニュー・ウェーブを訪ねて、他……………5
- ◆大型活字本『ゆびで聴く』を出版して……………6
- ◆中国基金会訪日団を迎えて、他……………7
- ◆新刊紹介、お知らせ……………8

研究助成などに800件を超える応募

研究助成および市民活動助成の一般公募については、本年4月1日より行っていたが、この5月31日付けをもって締切った。応募状況と本年度の助成予定は下表の通りであるが、総数にして、研究助成は昨年度を上回り、市民活動助成は下回る結果となった。

選考は、この7月から9月にかけて行われ、10月の初旬には助成対象が決定される予定である。

インドネシア若手奨励研究助成には339件の応募

昨年度より開始した本助成については、前回(273件)を66件上回る339件の申請が寄せられた。

選考および助成対象の決定時期については、上記の研究助成などと同様。

経過報告会を開催

去る4月・5月、昨年度の研究助成および活動記録助成対象についての経過報告会を下記の通り実施した。

- 研究助成(個人奨励研究)：4月27・28日(水・木)
- 活動記録助成：5月14日(土)



ラオス貝葉文献セミナーに出席して

京都大学東南アジア研究センター所長 石井米雄

●多くの関心を集めて開催

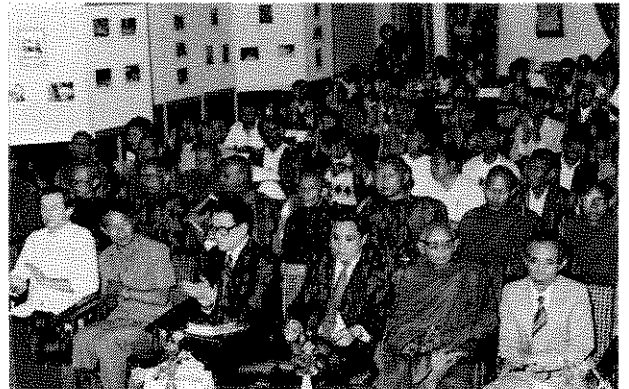
1988年3月10日から同15日まで、6日間にわたりラオス人民民主主義共和国の首都ヴィエンチャンにある「革命記念博物館」講堂において、ラオス文化省主催・トヨタ財団助成による『第1回全国貝葉文献セミナー』が開催された。

セミナーには文化大臣、文化副大臣、ラオス仏教会会長、文化省文化・文学研究所所長のほか、ラオス16州のそれぞれから州サンガの幹部僧、文化省、文部省関係者など約80名が出席した。外国からは、私が招待講演者として招待された。本セミナーは、この種の初めての集まりとあって各方面の関心を集め、開会式の模様は国営テレビで放映されたほか、3月11日付けの新聞「パサーソン（人民）」と「ヴィエンチャン・マイ（新しきヴィエンチャン）」のいずれでもその第一面を飾った。

このセミナーは、ラオスの全国各地の主として寺院を中心に散在していると考えられる貝葉資料の所在を確認した上で、これをいかに保存し、いかに活用するかの方法についての予備的検討を行うことを目的として開かれたもので、すでにトヨタ財団がタイ国において成功裡に助成を行ってきた同種の「貝葉文献保存プロジェクト」に刺激を受けたものと考えられる。因みに、貝葉とは、熱帯アジアの各地に古くから用いられている文書の形態で、乾かしたタリポット・ヤシの葉の上に鉄筆で文字を書き、その文字に墨を入れて見やすくした書物の一種を意味する。

●文化副大臣の演説に感動

会議は先ず文化副大臣の基調演説に始まったが、この中で同副大臣は、貝葉文献のラオス民族の文化遺産としての重要性を指摘し、この貴重な国家的財産を保存しこれを子孫に伝えるために、特に寺院管理の任にある僧侶の役割を強調した。1975年のラオス革命以後の仏教の状況は国外には必ずしも正確に伝えられておらず、当初私も、このセミナーに多数の仏教界の幹部が出席しているという事実をどう評価するべきかについて、いささかの戸惑いを感じていたので、この副大臣の演説には深い感銘を覚えた。これを聞いて私は、ラオス革命の過程には、



▲セミナー風景(前列右・文化副大臣、2人おいて筆者)

中国の文革において見られたような、徹底した伝統文化の破壊ないし伝統的文化価値の否定はなかったのではないかという印象を抱いたのである。もっとも、後日、ヴィエンチャン滞在のあるフランス人の事情通から聞いた話では、革命の直後には、仏教の否定ともとられるような政府の態度も見られたが、近年それが徐々に旧に復しつつあるとのことであった。今回の貝葉文献の場合のように、その大半が僧侶の管理下にある資料の場合には、これの保存の成否はかかって僧侶の協力にあることは言うまでもない。それが今回の副大臣の演説になったものであろうが、それにしても貝葉と言ひ仏教と言ひ、ラオスの伝統的文化価値を全面的に認めたこの内容は、現在のラオスを考える上に見逃すことの出来ない重要な意味をもっていると考えなければなるまい。

●好評を得たタイ語での講演

私は、タイ国における貝葉文献保存計画に最初から関係した一人として、その経験をタイ語で講演した。タイ語とラオス語とは方言差程度の違いしかなく、通訳抜きで行ったこの講演は幸い好評で面目をほどこすことが出来た。はじめラーオ人の微妙な対タイ人感情を考え、英語で話させて欲しいと申し入れたのだが、直接話を聞きたいので是非タイ語でという主催者側の話を素直にとつてタイ語にしたのが良かったのであろうか。

文化・文学研究所所長は、「このセミナーの成功の上に、今後さらに具体的な保存計画を企画、推進して行きたいのでそれにも是非協力して欲しい、ラオス訪問は今回限りなどと絶対に考えないでくれ」と、繰り返し私の手を握った。

トヨタ財団の助成が、見事な花を咲かせる日を想像しながら私もまた手を強く握り返したのである。



インドネシア若手研究者 奨励研究助成について

国際助成部門 牧田東一

1987年度より、インドネシア若手研究者奨励研究助成を開始した。この新しいプログラムは国際助成の枠内に位置づけられるが、いくつかの従来に無い要素が含まれている。そこでこの機会に、この助成の趣旨および1987年度の応募・選考経過などについて報告したい。

●助成の趣旨とその特徴

この助成は、インドネシアの若手研究者（原則として35歳以下）による個人研究に的を絞っている。ここでは、助成研究の成果もさることながら、若手研究者にその能力を伸ばしていくための機会を提供することに主眼を置いている。この趣旨に合うよう、プログラムの枠組には新しい試みが盛られている。

第1に一般公募制を採ったことである。研究助成では当初から一般公募制を敷いているが、海外を相手とする国際助成では相手国の状況が分かりにくく、また事務局の能力を超える申請数が予想されるため、財団スタッフによるプロジェクト開拓に重点が置かれている。しかしながら、広大な国土と1億6千万人の人口を持つインドネシアで有望な若手研究者を財団スタッフが広範囲に亘って探し出すことは難しい。そこで一般公募制が導入されたわけである。

第2に、公募・申請・選考・研究実施の全プロセスを原則的に全てインドネシア語化したことが挙げられる。応募要項・申請書等は全てインドネシア語で作成、配付され、申請者はインドネシア語で申請書を書き、選考もインドネシア語の分かる専門家がを行い、研究報告書等もインドネシア語が使われる。外国語能力が高いかどうかは、優れた研究者であるかどうかの必要条件ではない。むしろ本助成では外国語がよく出来ないインドネシア

の大多数の人々へアプローチすることを狙った。これに関連して、選考にあたる専門家にインドネシア人の学者を加え、日本人のインドネシア研究の専門家と共同して選考してもらうこととした。

第3に、助成の対象として求める研究内容に、「急激な変化の中にあるインドネシア社会において、その固有の文化・伝統・歴史を見つめ直す（ことに繋がる研究）」と、「急速な社会的・文化的変化を適確に理解する（ための研究）」（応募要項から、原文インドネシア語）という様なゆるやかな枠を設けたことである。これは申請件数を対応可能な数に抑える目的の他、財団の問題意識の表明でもある。

●昨年度の応募状況、選考経過から

1987年度は273件の応募があった。初年度としては予想をはるかに上回る申請件数である。1988年度の実績は既に締切ったが、さらに申請件数が増え、339件の申請があった。インドネシアの全国（西はアチェから東はイリアンまで）から申請があったという地域的な広がり、他、大学等の若手講師、大学院生以外に新聞記者やNGO関係者からも申請があったという所属、職種の上での広がりも指摘される。

選考に当っては前述の通り、インドネシア人専門家と日本人専門家がペアになって1件の申請を評価したわけであるが、その評価には思っていた程の差は生じなかった。全体的傾向としてインドネシア人委員の方が慎重で、成果が確実に期待できる申請を推したのに対し、日本人の委員は発想の斬新さに魅かれるケースが多かったのは面白い現象である。

一方、インドネシア側、日本側の共通の意見として挙げられたことは、「テーマは非常に面白いが、研究の方法論において弱いものが多かった」ということである。これはむしろ、申請書を書くこと自体に不慣れであるということに起因するのかもしれない。委員の知りたい事が何なのかを申請者がよく理解していないと

いうことである。

こうして両委員ともが強く推薦した申請17件が選ばれた。17件の内訳をみると、インドネシアの「地方」に相当するジャワ島以外の島々からも少しずつ選ばれたが、中心となったのはジャワ島の大都市ジャカルタ、バンドゥン、ジョグジャカルタの若手研究者であった。結果的にインドネシアの学術・教育の現状を反映することとなった。また、修士論文や博士論文執筆のための研究が多い。これは、既に指導教官により手が加わっている事を思えば当然である。むしろ印象的なのは、NGO等で働く若者の研究が4件選ばれた事である。申請件数という分母から考えるとこの採択率は非常に高い。委員の印象として、このような人々の申請は概して、研究に対する態度が切実かつ真摯であり、発想が型にはまらず斬新であるとされた。この助成の主たる対象は社会・人文科学である。これら諸科学にとって、社会批判の精神がいかに重要であり、NGO等で働く若者にこうした批判精神が豊かであることを示したと言えよう。反面、大学の研究者に、既存の理論や方法を踏襲し、研究対象を変えただけというような申請が多かったのは、大学における研究のあり方の上で一つの問題を提起したと言えよう。

●順調に進んでいる各研究

1988年4月から5月にかけて、財団スタッフ2名による助成対象者インタビューが行われた。研究を開始してから半年が経過している。概して研究は順調に進んでいるようであった。何よりも、助成対象者が選ばれた事を誇りに感じ、真面目に研究に取り組んでいる事に秘かに安堵した。前述した様な方法で適切な人材を選び出せるか、内心不安を持っていたからである。1988年末には、各助成研究の成果がまとまる。その時になって初めて、この助成の狙いが達成されたかどうかははっきりとしてくるだろう。



国際シンポジウム『医療におけるテクノロジー・アセスメント』を開催

MTA研究会代表（東北大学文学部） 吉田 忠

◆MTAとMTA研究会の活動

超音波診断装置、CTスキャンなど先端技術に象徴される新しい医療機器の開発・実用化が、診断・治療にめざましい効果を発揮してきたが、同時にこの医療における機械化の到来は、医療費高騰や患者の疎外感の増大といった種々の問題を引き起こしてきている。こうした医療技術を、その安全性、有効性、効率性、そして社会・倫理への影響など多角的視点から総合的に分析・研究し、これを評価（アセスメント）するのが「医療におけるテクノロジー・アセスメント」（MTA：Medical Technology Assessment）である。

MTA研究会は、内科医、外科医、公衆衛生学者、医療経済学者、医学史家、医学教育・バイオエシックスの専門家、厚生行政官などを中心メンバーとして1985年6月発足し、トヨタ財団から1985年度に予備的（第II種）研究、及び1987年度に総合（第III種）研究の助成を受け、今日まで研究活動を続けてきた。その間、胃癌検診の評価、出生前診断とバイオエシックス、医療経済学など有識者をゲスト・スピーカーに招く研究例会を開き、また昨年1月から2月にかけて医療情報吟味法、医学判断学、医療経済学をテーマにとりあげた3回のワークショップ「医療を計る」シリーズを開催し、好評を得てきた。

◆盛況だったシンポ

こうした経過をふまえ、MTAの概念と効用を広く一般に知っていただくため、MTA研究会主催で、トヨタ財団からも一部「成果発表助成」を受け、本年1月30、31日の両日、国立がんセンター内国際研究交流会館において国際シンポジウムを開催した。外国人研究者4名を招待し、ピーク時には会場一杯（200名余）の参加者が出席し、盛況裡に終わった。

まず、大島正光・医療情報システム開発センター理事長の挨拶の後、郡司篤晃・東大教授の司会のもと、筆者が基調講演をし、アメリカのMTAを行政側から推進してきたS. ペリー・現ジョージタウン大学教授によるMTAの歴史的概観と現状についてのサーヴェイ報告があった。これに対しE. バウラモ・フィンランド医学審議会委員から同国の現状について紹介があり、続いて日本の行政側からの取組みと期待について寺松尚・厚生省科学審議官から報告があった。

その後、MTAの権威H. ファインバーグ・ハーヴァード大学公衆衛生大学院院長から「MTAの現在と未来」と題してMTAの概念とその役割について基本的な考え方の開陳があったあと、吉利和・日赤医療センター院長から内科医としての立場からの現場の事例を引用しながらのコメントがあった。さらに、D. パーウィック・ハーヴァード大学医学部教授からMTAの方法論的諸問題、その原理と落とし穴についての話があり、これに対し西村周三・京大教授が日本の実情に引き寄せてのコメントを行った。最後に中川米造・大阪大学教授が総括コメントを行って締め括った。

◆各所から受けた多大な反響

今回のシンポジウムでの各講演はMTAの具体例というよりは、理念的・原理的な総論の性格が強いものではあったが、第一回の国際会議としては、まず

その概念のアウトラインを理解していただくことに重点をおいたので成功ではなかったかと自負している。

このシンポジウムについては、朝日、毎日、読売の三大紙をはじめ、種々の医学メディアが取材・報道し、参加者のうちからも激励の言葉を頂戴するなど、多大の反響があった。

MTAは定量的方法がその手段の一つであるが、なかでも医学判断学(Medical Decision Analysis)が有力な手がかりを与えてくれる。先のワークショップを契機として、わが国でも医学判断学の研究会が結成され、今回のシンポジウムでも、ファイナバーグ、パーウィック両教授を講師にワークショップがもたれた。集団検診の評価の必要性が学会でも報告されるなどMTAの重要性が徐々に認識されてきているが、厚生省でも本年5月の厚生会議でMTAがとりあげられ、医療機器に対しMTAを行っている財団法人・医療機器センターの調査評価委員会委員長齋藤正男・東大教授と筆者が説明を行った。

MTAは医学判断学やバイオエシックス、医学情報学、医療経済学、医療政策学など多くの関連学問との学際的共同研究が不可欠である。6月25日慈恵医大で開催された医療情報学会の情報教育研究会で、こうした医療をめぐる学問分野の一つにMTAも取り上げられて報告があった。今後、このような学際的、職際的共同研究を通じて、MTAの事例研究を積み重ね、その概念・原理の普及と実用化を期したい。

▼報告を行う筆者





未来への模索～アメリカのニュー・ウェーブを訪ねて～

科学史科学教育研究所 吉沢広祐

ポスト産業社会の波にゆれ、あたかも世紀末の矛盾を一手に引き受けているかに見えるアメリカ合衆国。レーガン政権下、保守派の台頭に見られる「強いアメリカ」の復活に対して、今年の大統領出馬選での黒人候補ジャクソンの予想外の健闘ぶりに、苦悩するアメリカの姿を見た人も多かっただろう。

❖新旧交代の激しい草の根運動

今年の春、約1カ月間の訪米で、市民運動とくにコープ（協同組合）やコレクティブ（小規模共同事業体）に接した印象について報告してみたい。4回の訪米（81、82、86、88年）のなかでも、今回一番印象深かったのは、新旧の交代のはげしさであり、草の根運動の多様さ、そしてあらゆる可能性に挑戦する実験（実践）精神のダイナミックなパワーであった。

新旧の交代という点では、かつてアメリカ随一といわれたサンフランシスコ周辺に拠点をおくパークレー・コープの凋落ぶりである。70年代には組合員10万人以上、店舗も10数店あったものが、ほとんどつぶれて88年には3店舗を残すのみとなっていた。巨大化の中で専従職員と組合員との間にミゾができ、マネジメント能力の低下とともに、良質な商品（有機・自然食品）や組合へのサービスの手法が、他の大型スーパー等に模倣されて坂道をころげ落ちるように衰退していった。

背水の陣・起死回生の策として、職員が生協の半分を所有する、旧来の生協から半分労働者生産共同組合の要素をとり入れる試みに着手していた。もし成功すれば、新しいタイプのハイブリット（雑種）コープが誕生することになるだろう。

❖足場を固めつつあるニューウェーブ

そうした旧来型のコープの脱皮現象とならんで、70年代から登場しはじめたニューウェーブのコープやコレクティブは、

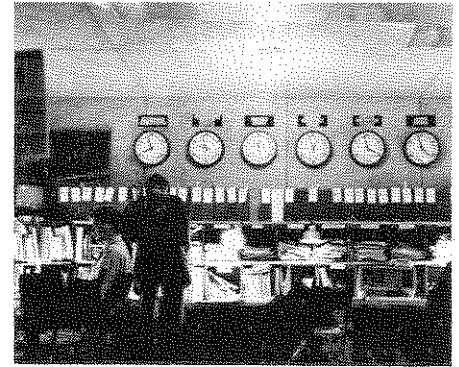
一時の停滞期を脱して、足場を着実に固め始めているようにみえた。

西海岸最大の自然食品コレクティブ「レインボー」も急速に事業を拡大していた。オルターナティブ派の書類の共同購入・通信販売コレクティブ「ブックビープル」は、毎年1万冊以上をのせた特選カタログを発行、遠く海外へも事業を伸ばしている。

ワシントンDCに本拠をかまえる「コープアメリカ」の急成長ぶりはめざましい。83年発足したばかりのこの組織は、全米に広がるコープやコレクティブと彼らを支援する人々を結びつけ、新しいマーケットをネットワークする団体だ。各地の事業体のなかで特色ある産物をリストアップ、カタログをつくり、通信販売（メンバー特別価格）の仲介や、保健組合の事業と合わせて社会的に意義ある事業に融資をする事業おこしを行っている。80ページほどのカタログには、素材やデザインや生産過程を含味した自然派の好みにあう衣類や日用品、各種道具、おもちゃ、本、食品などを紹介、第3世界ショップの品物も目につく。当初4千人ほどが、年々倍増、88年春で4万人ものメンバーに急成長。カタログは年2回、別に季刊誌「ビルディング・エコノミック・オルターナティブ」を発行している。

▽ ▽ ▾

最後に、今回出会ったユニークな集団「移動するコミュニン」について一言ふれておこう。15人ほどの集団（女性3人、60代から20代）、ワシントンDCとサンフランシスコにそれぞれ拠点をもち、情報化社会の「便利屋」として、ジャーナリズム・コンサルティング・コンピュータ（グラフィックやソフト開発）関連の仕事を行う。仕事はすべて個人的信頼関係の中で行い、「お礼制」をとり、共同プールする。そして、固定した名称をもたず、



▲“自由人集団”のオフィス

文章としての規約もなく、毎日リーダーを選びあい、要請があれば海外へも飛んでいく。各自パソコン通信で、どこにいても個人的体験や出会いを共有・共感しあう。脱産業化社会を先取りする。「ファミリー型自由人集団」といった方が良さそう。今、彼らの何人かが日本にやって来ている。（本文は、1987年度個人奨励研究助成による経過報告）

注）コープ、コレクティブについては、『もう一つの暮らし・働き方をあなたに』（四六判274頁、1,500円、吉沢広祐、他・著、新時代社・刊）を参照。

Information.....

日本のボランティア'88

ネットワークング

—日本青年奉仕協会より出る—

社団法人日本青年奉仕協会（略称JYVA）は、19年前から毎年、「全国ボランティア研究集会」という催しを続けている。

本書は、今年2月に開かれた19回目テーマ『多発・多元・多重するネットワークング』一の成果をまとめたもの。

「ボランティアはディフェンスではなくオフェンスだ!」、「失われつつある連帯感、人の心の暖かさをつなぎ合わせるボランティア活動」、「たった一人のファンタジーからたくさんの人々のファンタジーに」など、発信・受信そして交信しようとしているボランティアのニューウェーブを見てとれる。（A5判、248頁 定価1,600円、日本青年奉仕協会・編、LGC総合研究所・刊）



大型活字本『ゆびで聴く』 を出版して 松籟社 相坂 一

◆はじめに

はじめて福島智君に会ったのは、昭和61年5月15日、トヨタ財団の「1985年度研究助成・特定課題中間報告会」の席上であった。その日は、一編集者として淡々と各グループの発表に耳を傾けていた。

午後の部の最初に、「福島智君とともに歩む会の活動に関する記録の作成」についての報告が、代表者の小島純郎氏より行われた。その話かたが静かなだけに、よけいに他人に感動を与えている様子であった。その後、福島さん本人が話したのだが、少し声が高く感じる以外はその話しぶり、内容、論理性には、私の予想に反して精神的な安定さを十分感じるものであった。

それから数ヵ月ほど経ってから、同会の事務局長である塩谷治氏から連絡があり、当社で本にさせていただくことになったわけである。

◆何故、大型活字本なのか

初期の段階では、もちろん普通の版面の本しか考えていなかったわけだが、編集の段階で塩谷さんから、出来たら大型活字の本を出せないだろうかという話があった。福島さんの協力者には、晴眼者だけではなく、普通の活字では読めない人や読みにくい人がいること。また、本当にこの本や指字について知りたい人で、活字が小さいが故に読書が困難な人が大勢いる、ということなどを聞かされ、それなら一応の調べに入った。

まず調査したのは、どのくらい大型活字本が流通しているかであるが、大型活字本を専門に出版しているのは、埼玉福祉会、東京ルリール、どらねこ工房の3社ぐらいで、その他一般の出版社が何冊かを出版している程度というのが現状のようであった。

数年前に大型活字本の出版ブームが起

きた頃には、大手の出版社を中心に、辞書等の特殊なものさえ出版されたほどだったが、現在その売れ行きの悪さにはほとんどが手を引いたようである。

一方、大型活字本を作ること自体は、出版社、印刷所、関係者等の協力により何とかすることは分かったものの、いかんせん、そのネックは売ること自体にあることが判明した。

大型活字を本として見た時、最高でも500部の世界であり、もしそれを商業印刷物として出版した時、この本では少なく見積っても8,000円の定価が必要であった。むろん黒字になるなどということは最初から考えてはいなかったが、まさかそれ程売れないものとは考え外であった。外国において商業ベースで大型活字本が出版されているのは、一般人が読むこと・買うことに抵抗がないだけでなく、公共図書館での買上げの制度が確立されているからのようである。

しかしながら、その問題もトヨタ財団の成果発表助成による印刷費および買上げ費の補助によって解決し、この度の出版の運びとなったわけである。

ここで、同時出版となった普通本と比較・対照してみると下表のようになる。

◆指字について

両目の見えない福島さんは、高校2年の時、聴力まで落ちてきた。わが子の行く末を案じた母親の礼子さんは、彼の手をとり、点字タイプライターを打つ要領で、両手の人差指から薬指まで、合せて6本の指を軽く叩きながら、「サ・ト・シ、ワ・カ・ル・カ」と点字を打ってみた。彼は即座に理解し、これが指字の始まりとなった。

点字は一つの文字・記号が、6つの点凹凸の組合せにより構成される。普通は



紙や板の上に記されたこのような凹凸を指で触れて読みとるが、福島さんは、凹凸を作るという作業を省くことにより、指字を発明した。これまで誰も思いつかなかったのが不思議なくらい簡単なものだが、これには非常にすぐれた特徴がある。従来、盲ろう者は、片手の指で文字を作る指文字や、手のひらに文字を書く手書き文字を使っていたが、指字はこれらと較べてスピードが早い。普通の会話には十分ついていける。また、表現が正確かつ豊かで、新しい記号や略語も容易に作れる。さらに、点字タイプを使う時の、発信者と受信者間での時間差もない。一方、短所としては、点字を知っている人しか会話が出来ないこと、両手がふさがること、などである。

◆出版してみても

5月末日にやっとのことで出版にこぎつけたわけだが、朝日、毎日、サンケイの各紙やテレビ朝日のニュース番組での紹介等々、マスコミでの紹介も思ったより多かった。その後、同じ様な境遇の方からの電話や励ましのお便りなどをいただいた。久しぶりに出して良かった本、満足出来る本になったようである。

	大型活字本	普通本
頁	400頁	256頁
字詰め	37字15行 (555字/頁)	52字19行 (988字/頁)
字 体	20級 (14ポ)	13級 (9ポ)
書 体	ゴチック体	明朝主体
定 価	3,200円	1,800円



「中国基金会訪日団」を迎えて

研究助成部門 山岡義典

ここ数年来、中国では「基金会」の設立が相次いでいる。「基金会」とは、日本語の「財団」のことである。例えば、トヨタ財団は中国では豊田基金会ということになる。ちなみに中国で「財団」といえば「財閥」のことを意味し、あまりいい響きはないらしい。

【6人の訪日スタッフ】

その中国の3つの基金会から6名のスタッフが、この6月15日、当財団の助成で日本を訪れた。10日間にわたって日本の民間助成財団や助成型特殊法人をインタビューし、その組織形態や活動の実態を調査・考察するためである。

訪日したのは、国家社会科学基金会から王笑(訪日団長)、宇淑蘭、曲憲光の3氏、国家自然科学基金委員会から李性慈、湯錫芳の両氏、それに中国国際人材交流基金会から陳東威氏である。

いずれの基金会もここ2～3年の間に設立されたもので、その財源を政府の補助に頼っている点でわが国の特殊法人に準ずるものであるが、将来は民間や外国からの寄付の受け入れを予定しているなど、かなり政府から独立した民間的な組織とすることを意図しているようである。その助成活動も政府の活動とは独立に行っていることを、どの基金会も強調している。今回の訪日には、この他、改革与開放基金会からも1名が参加の予定になっていたが、この基金会はアメリカの篤志家の寄付による純粋に民間の団体である。基金会の設立は、中国社会における新しい潮流と言ってよいだろう。

【民間財団や特殊法人をインタビュー】

訪日団は、まず2日間にわたって助成財団資料センターに陣取り、民間助成財団の活動実態について7名の関係者から詳しい説明を受け、熱心に質疑や討論を行なった。その後大阪に向かい、日本生命財団の協力によって関西の財団関係者との懇談会をもつことができた。

後半の日程は、政府系の助成組織のインタビューである。総合研究開発機構、日本学術振興会、国際交流基金、新技術開発事業団を訪問し、その組織や事業の内容についてかなり立ち入ったヒヤリングを行なった。

【大使館でセミナーも】

6月23日(木)の午後には、中国大使館において同大使館科学技術部の主催によるセミナー「中国的基金会の現状」がもたれた。助成財団資料センターの協力により、大使館関係者の他、財団関係者約40名が参加した。

セミナーでは、中国の3つの基金会の性格やこの2年間の活動内容が具体的に語られ、質疑応答を通して最近の中国の学術研究振興の状況についても知ることができた。これらの概要は『公益法人』(公益法人協会の機関誌)7月号に紹介される予定であるが、研究者が自ら研究計画を立て、研究費を申請し、それらを政府とは独立した組織で選考して助成金を出すという仕組みがスタートしたことは、我々が想像する以上に大きな意味をもっているのではないだろうか。

セミナーの後にはレセプションも準備され、日中の財団関係者相互の交歓が賑やかに展開された。

▽

これら一連の交流を契機に、今後の財団関係者の相互理解が一層発展することになれば、企画実現の一端を担った者として大変幸せである。

最後に、貴重な時間を割いてインタビューに応じていただいた多くの関係者の皆さんに、そして様々な形で便宜と配慮をいただいた中国大使館、助成財団資料

センター、日本生命財団にお礼を申しあげたい。

また、訪日団とトヨタ財団の間になつてコーディネイトの労をとっていただいた田恒氏、長時間にわたる通訳をこなしていただいた戴禾、季衛東、李廷江の各氏に感謝申しあげたい。

日本の助成団体の現状

—助成財団資料センターより出版—

昨年の末に助成財団資料センターから『助成財団要覧1988』が出版になったが、この程、その「解説編」にあたる標記の小冊子が刊行された。

内容は、『要覧』収録の民間助成団体のうちより一定の基準で抽出した171団体を対象に、設立年次別、主務官庁別、事業分野・事業形態別、規模別、地域別、に分析したものが中心(他に205件の公益信託の概要と用語解説がついている)。

現在の助成財団を理解する上での格好のハンドブックである。

(B5判 46頁 領布価格500円)

[問合わせ先]

東京都新宿区新宿2-1-14

エレメンツ新宿ビル3F(〒160)

(財) 助成財団資料センター

☎ 03-350-1857

新刊紹介……………

『ゆびで聴く——盲ろう青年
福島智君の記録——』
「福島智君とともに歩む会」
小島純郎・塩谷 治 編著
松籟社・刊
(普通本) A5判 256頁 1,800円
(大型活字本) A5判 400頁 3,200円

視聴覚二重障害者として日本で始めて大学へ行った福島智君と彼を支える会の活動記録。記録の作成、普通本の出版および大型活字本の出版には、各々、昭和59年度研究助成・特定課題、61年度活動記録助成および62年度成果発表助成が当財団より行われた。(P.6参照)



トヨタ財団での意見交換風景



『心のネットワークづくり
—やどかりの里の活動記録—』
谷中輝雄、藤井達也・編著
松籟社・刊
A 5判 219頁 1,800円

社会の中で生きることを否定され続け
てきた精神障害者たちとともに生活し、
病気の再発・悪化を食い止めようとする
活動の場が「やどかりの里」(埼玉県大宮
市)である。

本書は、その活動の歴史を始め、活動
の内容や成果について、スタッフの側から、
そして精神障害者の側からそれぞれ
まとめたものである。昨年度の精神保健
法の成立に伴い、一層前向きに活動に取
組んでいる関係者等の息遣いが聞こえて
きそうな書である。なお、当財団からは、
昭和59年度研究助成・特定課題で記録の
作成に、61年度活動記録助成で本書の出
版に助成が行われた。

『あふれるところをこの街で—明るい
老後を考える会の活動記録—』
「明るい老後を考える会」・編著
雲母書房・刊
A 5判 235頁 1,800円

東京都町田市において、主に食事の支
度が不自由な高齢者に対する調理配達を
実施しているのが「明るい老後を考える
会」である。

同会は、食事サービスを組織化し継続
する中で、高齢者との触れ合いを活動の
重点目標としているが、本書は、これま
でのその活動経緯をまとめたものである。
市と協力して在宅福祉サービス公社を設
立するなど、高齢化社会に直面し、在宅
福祉の充実が問われている昨今、大いに
参考となる一書である。なお、この記録
の作成および出版には、当財団より昭和
61・62年度活動記録助成による助成が行
われた。

『カラスはどれほど賢いか
—都市鳥の適応戦略—』
唐沢孝一・著
中央公論社(中公新書)・刊
新書判 234頁 580円

都市鳥研究会の、第3回研究コンク
ール特別賞受賞研究の成果をもとに、会
の代表者である著者が、カラスに焦点を当
てて独自の視点から書き下ろしたものだ。
3年余の研究会の成果を中心に、さらに
各地でこれまでに観察された情報を駆使
し、都市におけるカラスの生態をさまざ
まな角度から捕らえている。観察や調査
の方法・苦労話しも具体的に興味深く書
かれており、都市鳥観察読本としても活
用できそうである。

『航空におけるINCIDENT REPORT-
ING SYSTEMに関する総合的研究
(「航空法務研究」18~22)』
航空安全研究プロジェクト・チーム
(代表 宮城雅子)・著
有斐閣・刊
A 5判 上製 586頁 9,500円

科学技術の発達とともに機械-人間系
システムの安全確保が大きな課題となる
が、その対策のひとつに、事故には至ら
なかった様々な不安全事故(インシデン
ト)を収集・分析して、事故要因を事前
に取り除こうという手法(IRS)がある。
航空分野でもその実施が期待されながら、
わが国では諸般の事情から実現されてい
ない。

当研究チームは、純粹の第三者的立場
からその困難な手法に敢えて挑戦し、機
長などの乗務員から多数の生情報を収集
し、独自の手法によって現状の問題点を
鋭く分析した。それが本書で、1986年度
第III種研究助成(2年間)の成果。

『ラーン・ナーの寺院壁画』
ソン・シマトラン・著
星野龍夫・訳
アジア民族造形文化研究所・刊
A 4判 180頁 20,000円

1978年より3年間にわたる国際助成に
よって推進された、シンラバコン大学助

教授ソン・シマトラン氏によるタイ北部
の寺院壁画に関する研究成果の一端は、
昨年9月の日タイ修好100周年記念シン
ポジウムでの報告や東京・大阪・名古屋
で開催された「タイ美術展」での写真パ
ネルの展示によってわが国にもすでに紹
介されているが、この度、その全貌を知
ることのできる基本文献が日本語で出版
された。それが本書で、161点のカラー図
版とその詳細な解説、それに壁画内容に
ついての説話解説から構成されている。

お知らせ

当財団では、下記のとおり報告会を
予定しております。ご関心おありの方
は、研究助成部門までご連絡ください。
●1987年度助成研究第II種経過報告会
・8月19日(金)・20日(土)
●第5回研究コンクール予備研究報告会
・8月26日(金)・27日(土)
なお、場所は、いずれも国際文化会
館(東京都港区六本木)を予定。

編集後記

▶暑中お見舞い申し上げます。

いよいよ日本列島も夏本番を迎えまし
たが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

▶財団スタッフにとっては、毎年のこと
ながら、夏から秋にかけてが超多忙な時
期。今年も各助成の選考に伴う準備・
運営・フォローなどに日夜追われまくっ
ている次第です。

▶これに関連し、今月の初旬には第5回
研究コンクールの現地インタビューとし
て、トカラ列島(屋久島と奄美大島との
間に位置)に行ってきました。

厳しい自然条件や過疎化の現実を目の
当たりにし、都会や机上の発想がいか
に空しいものかを再認識させられました。

▶なお、今回ご寄稿いただきました皆様
には厚くお礼申し上げます。

トヨタ財団レポート No. 45

このレポートを継続してご希望の
方は、お葉書にて財団宛てお申込
ください。

発行日 1988年7月25日
発行所 財団法人トヨタ財団
発行者 山口日出夫
編集者 渡辺 元
印刷 真友工業株式会社